

持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針
＜改訂版＞

平成29年8月
埼玉県

持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針目次

第1	趣旨	1
第2	持続性の高い農業生産方式について	2
第3	持続性の高い農業生産方式の導入の促進 を図るための措置に関する事項	7
第4	その他の事項	7
第5	導入すべき農業生産方式一覧表	8
第6	農作物別持続性の高い農業生産方式の内容	10

第1 趣 旨

農業は、従来から環境ともっとも調和した産業と言われ、生産活動を通じ食料の供給はもとより、自然環境の保全・水源のかん養など多様で重要な役割を果たしています。

しかしながら、効率の良い生産を求めらる中で、多肥栽培や農薬の過度な使用など、環境への影響が懸念されています。また、近年、消費者の環境保全に対する意識が高まり、有機農産物等の環境に配慮して生産された農産物へのニーズが高まっています。

国では、環境と調和のとれた持続的な農業生産をより一層推進するため、平成11年に「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（以下「持続農業法」という。）」を施行し、たい肥等を活用した土づくりと化学肥料・化学合成農薬の低減を一体的に行う生産者を「持続性の高い農業生産方式に取り組む生産者（通称：エコファーマー）」と位置づけました。

本県においても、県内農業が将来にわたって環境と調和しつつ持続的に発展していけるよう、平成9年度から23年度に実施した「彩の国有機100倍運動」において、環境負荷を軽減した環境にやさしい農業を推進し、「エコファーマー」の育成を図ってきました。その後、有機農業を環境保全型農業の重要な要素として位置づけた「埼玉エコ農業推進戦略」を平成26年度に策定し、引き続き「エコファーマー」の育成を図っています。

本指針は、持続農業法に基づき、本県における「エコファーマー」の認定に必要な持続性の高い農業生産方式について、有機物施用技術、化学肥料低減技術、化学農薬低減技術に関する具体的な内容を定めたものです。

第2 持続性の高い農業生産方式について

「持続性の高い農業生産方式」とは、土壌の性質に由来する農地の生産力の維持増進その他良好な営農環境の確保に資すると認められる合理的な農業の生産方式であり、次の3つの区分の中から省令で指定されている技術をそれぞれ1つ以上組み合わせるものをいいます。

1 たい肥その他の有機質資材の施用に関する技術であって、土壌の性質を改善する効果が高い技術

(1) たい肥等有機質資材施用技術

土壌診断（可給態窒素含有量及び土壌有機物含有量を含む土壌の性質の調査・分析）を行い、その結果に基づき、たい肥等有機物資材であって窒素成分と炭素成分のバランスのとれたもの（炭素窒素比（C/N比）がおおむね10から150の範囲となるもの）を施用する技術をいいます。たい肥等有機質資材の範囲としては、たい肥のほか、稲わら、作物残さ等は含まれますが、樹皮及びおがくずについては、炭素窒素比が大きく、作物の生育に障害を与えるおそれがあるため含まれません。また、施用する種類や量については、土壌診断の結果に基づく適正なものと考えられるものとし、過剰な施用や未熟なたい肥の施用により、作物の生育を悪化させ、又は地下水の汚染等環境に負荷を与えることのないよう留意する必要があります。

(2) 緑肥作物利用技術

土壌診断（可給態窒素含有量及び土壌有機物含有量を含む土壌の性質の調査・分析）を行い、その結果に基づき、緑肥作物（農地に有機物や養分を供給するために栽培される作物）を栽培して、農地にすき込む技術をいいます。緑肥作物の種類は限定しませんが、有機物や養分に富み、農地にすき込むものであり、地域に適合したものを選択することが必要です。

また、本技術の導入に併せて合理的な輪作体系の確立を図ることが望ましいです。

なお、選択した緑肥作物の種類によっては、対抗植物としての効果を有するものがあり、この場合は、持続農業法第2条第3号の技術である「対抗植物利用技術」を同時に導入しているものとみなします。

2 肥料の施用に関する技術であって、化学的に合成された肥料の施用を減少させる効果が高い技術

(1) 局所施肥技術

肥料を作物の根の周辺に局所的に施用する技術をいい、水稻作における側条施肥もこれに含まれます。

本技術の導入においては、肥料による作物への濃度障害を回避する観点から、農作物の種類、肥料の種類等に応じて施肥する位置等を調整する必要があります。

また、労働時間の軽減を図る観点から、側条施肥田植機や畝立マルチ施肥機等局所施肥と同時に他の生産行程を行う農業機械を積極的かつ効率的に利用することが望ましいです。

(2) 肥効調節型肥料施用技術

本技術は、普通肥料のうち、いわゆる被覆肥料、化学合成緩効性肥料及び硝酸化成抑制剤入り肥料を施用する技術をいいます。

本技術の導入においては、これらの肥効調節型肥料の種類により肥効パターンが異なることを十分考慮し、農作物の種類、土壌条件及び気象条件に応じて肥料の種類を選択する必要があります。

(3) 有機質肥料施用技術

有機質（動植物質のものに限る。）を原料として使用する肥料を施用する技術をいいます。

施用する種類や量については、土壌診断の結果、農作物の種類、含有する肥料成分等を勘案して適正と考えられるものとし、過剰な施用や未熟なたい肥の施用により、作物の生育や品質を悪化させ、又は環境に著しい負荷を与えることのないよう留意する必要があります。

なお、本技術で利用される肥料には、いわゆる有機入り化成肥料も含まれますが、上記の二つの技術（局所施肥技術・肥効調節型肥料施用技術）が、化学肥料の使用を3割程度低減することが可能であることを考慮すれば、有機質由来のものが原料ベースで3割以上含まれているものを使用することが望ましいです。

3 有害動植物の防除に関する技術であって、化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高いもの

(1) 温湯種子消毒技術

種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着した有害動植物を駆除する技術をいいます。

本技術の導入においては、浸漬する温度や時間により防除効果や発芽率等が変動することから、適切な条件の下で行うことが必要です。

(2) 機械除草技術

有害植物（有害動物の発生を助長する植物を含む。）を機械的方法により駆除する技術をいいます。

本技術の導入においては、除草用機械による除草を効率的に行えるよう、農作物の栽植様式の調節やほ場の規模に応じた機械の種類を選択を行うことが必要です。

なお、本技術には、畦畔における有害動物の発生を助長する植物を機械的方法により駆除する技術が含まれます。

(3) 除草用動物利用技術

有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いをを行う技術をいいます。

具体的には、アイガモ又はコイを利用した水稻作が想定されますが、このほか、農業技術研究センター等で駆除効果が明らかとされた小動物を利用するものも含まれます。

本技術の導入においては、除草用動物が野犬等の外敵の被害を受けないよう、柵等で保護するなど適切な条件で行うことが必要です。

(4) 生物農薬利用技術

農薬取締法（昭和23年法律第82号）第1条の2第2項の天敵であって、同法第2条第1項又は第15条の2第1項の登録を受けたものを利用する技術をいい、捕食性昆虫、寄生性昆虫のほか、拮抗細菌、拮抗糸状菌等を導入する技術及びバンカー植物（天敵の増殖又は密度の維持に資する植物をいう。）を栽培する技術等が含まれます。

本技術の導入においては、害虫の発生密度や施設内の温度湿度等により防除効果変動することから、適切な条件の下で行うことが必要です。

(5) 対抗植物利用技術

土壌中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術をいいます。

対抗植物の種類は限定しないものの、農業技術研究センター等で防除効果が明らかにされ、地域の特性に適合したものを選択することが必要です。

また、本技術の導入においては、対抗植物の防除効果は特異性が高いことから、防除対象とする線虫等有害動植物の種類に応じて、その種類を選択することが必要であるとともに、合理的な輪作体系の確立を図ることが望ましいです。

なお、対抗植物には、有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する植物のみでなく、有害動植物の土壌中における密度を下げる等の効果が期待される非寄生植物も含まれます。

(6) 抵抗性品種栽培・台木利用技術

有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術をいいます。

抵抗性品種・台木の種類は限定しませんが、農業技術研究センター等で防除効果が明らかにされ、防除対象とする有害動植物の種類や地域の特性に適合したものを選択することが必要です。

(7) 天然物質由来農薬利用技術

有機農産物の日本農林規格（平成17年10月27日農林水産省告示第1605号）別表2に掲げる農薬（有効成分が化学的に合成されていないものに限る。）を利用する技術をいいます。

有効成分が化学的に合成されていない農薬とは、有効成分が全て天然物質又は化学的処理を行っていない天然物質に由来する農薬をいいます。

本技術は、農薬を利用するため、農薬取締法を遵守した使用が行われるよう十分留意するとともに、利用する農薬については有効成分が化学的に合成されていないものであることを製造メーカーへの問い合わせ等により確認する必要があります。

(8) 土壌還元消毒技術

土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいいます。

具体的には、畑において、有機物を施用するとともに、土壌中の水分を十分高めた上で、資材により被覆した状態を継続する技術のほか、農業技術研究センター等で防除効果が明らかにされた技術が含まれます。

なお、土壌を被覆する資材については、適正に処理せず廃棄すると、大気汚染等の環境負荷を与える恐れがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要があります。また、施用する有機物については、肥料成分を含有していることから、過剰な施肥につながらないように留意する必要があります。

(9) 熱利用土壌消毒技術

土壌に熱を加えてその温度を上昇させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいいます。

具体的には、太陽熱土壌消毒技術、熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術です。

本技術の導入においては、気候条件や土壌条件等により防除効果変動することから、地域の特性に適合したものを選択することが必要です。

なお、土壌に熱を加える前にその表面を資材で被覆する場合については、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こす恐れがある資材もあることから、その使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要があります。

(10) 光利用技術

有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため、有害動植物を誘引し、若しくは忌避させ、又はその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術をいいます。

具体的には、シルバーフィルム等の反射資材、粘着資材、非散布型農薬含有テープ、黄色灯及び紫外線除去フィルムを利用する技術です。

なお、粘着資材の利用と生物農薬利用技術を組み合わせて行う場合は、粘着資材で天敵を捕殺しないように注意することが必要です。

(11) 被覆栽培技術

農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術をいいます。

具体的には、べたかけ栽培技術、雨よけ栽培技術、トンネル栽培技術、袋かけ栽培技術、防虫ネットによる被覆栽培技術等です。

本技術の導入において、有害動植物による被害を予防する観点から、最適な被覆資材の選択、被覆状態の維持を行うことが必要です。

なお、本技術に用いられる資材は、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こす恐れがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要があります。

(12) フェロモン剤利用技術

農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とする薬剤であって、農薬取締法第2条第1項又は第15条の2第1項の登録を受けたものを利用する技術をいいます。

本技術の導入において、害虫の発生密度やほ場の規模等により防除効果変動することから、適切な条件で行うことが必要であるとともに、併せて発生予察を行うことが望ましいです。

(13) マルチ栽培技術

土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術をいいます。本技術の導入においては、まん延防止効果を維持する観点から、最適な被覆資材の選択、被覆状態の維持を行うことが必要です。

また、本技術には、わら類、被覆植物によるマルチ栽培技術も含まれます。

なお、本技術に用いられる資材は、適正に処理せずに廃棄すると、大気汚染等を引き起こす恐れがある資材もあることから、使用後の処理が適正に行われるよう指導する必要があります。

第3 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

持続性の高い農業生産方式の導入に当たっては、農地の生産力の維持増進による良好な営農環境の確保を図ることが重要であることから、土づくりのための有機質資材の施用や化学農薬に頼らない有害動植物の防除技術を活用する必要があります。また、これらの技術を定着させるためには、科学的な根拠に基づく栽培体系や技術組立を確立する必要があります。

そこで、この生産方式に取り組もうとする農業者に対して、関係機関が一体となって、積極的なアドバイスを行うとともに、その普及・定着のため次のような具体的支援を行ないます。

- 1 たい肥等の有機質資材の施用に当たっては、作付体系、作物別施用量、作付け前の土壌養分、たい肥自体の特性等を的確に把握する必要があることから、試験研究機関、農林振興センター及び農協等農業団体は、緊密な連携のもと、農業者からの依頼にもとづき土壌診断やたい肥成分等の分析を実施し適切な指導・助言を行います。
また、単一作物の連作による生産力の低下を防ぐため、効果的な輪作体系や緑肥作物の導入等による土づくりについて、適切な情報提供などの支援を行います。
- 2 化学肥料の低減を図るためには、有機質肥料、肥効調節型肥料等の特性及び栽培作物の吸肥特性を理解した上での肥培管理技術が必要であることから、試験研究機関、農林振興センター等は、試験成績や栽培実証・展示ほ等から得られた成果情報を積極的に提供します。
- 3 化学農薬の低減を図るためには、常に病害虫の発生状況を把握し、適切な対応が重要です。このため病害虫防除所では、主要農作物に関し、的確な発生予察情報を農林振興センター及び農協等農業団体に対して定期的に提供し、過剰な農薬の散布を防ぐ効率的防除の指導を行うこととしています。
なお、認定農業者等自らが、発生状況を把握するため情報ネットを活用した発生予察の情報提供を推進します。
- 4 これら生産方式組立のための農業機械等の導入に係る制度資金の活用などについて幅広く支援を行います。

第4 その他の事項

加須市及び白岡市では、地力増進法に基づく地力増進地域に指定され、地力増進対策指針が定められていることから、この対策指針の改善目標が達成できるよう留意する事が必要です。

第5 導入すべき農業生産方式一覧表

区分	有機質 資材 施用技術	化学肥料 低減技術			化学農薬低減技術															
		① たい肥等 有機質資材 施用技術	② 緑肥 作物利用 技術	① 局所 施肥 技術	② 肥効 調節型 肥料施用 技術	③ 有機質 肥料施用 技術	① 温湯 種子 消毒 技術	② 機械 除草 技術	③ 除草 用動物 利用 技術	④ 生物 農薬 利用 技術	⑤ 対抗 植物 利用 技術	⑥ 抵抗 性品 種栽培 ・台木 利用 技術	⑦ 天然 物質 由来 農薬 利用 技術	⑧ 土壌 還元 消毒 技術	⑨ 熱利 用土 壌消 毒 技術	⑩ 光利 用 技術	⑪ 被覆 栽培 技術	⑫ フェ ロモ ン剤 利用 技術	⑬ マル チ栽 培 技術	
内容																				
作物名																				
主穀	水稲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	麦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	大豆	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
野菜	きゅうり																			
	メロン	○	○	○	○	○	△		○	○	△	○	△	○	○	○	○			
	にがうり																			
	すいか	○	○	○	○	○	△		○	○	△	○		○		○	○	○		
	かぼちゃ																			
	トマト	○	○	○	○	○				○	○	○	○	△	○	○	○	○		
	ミニトマト																			
	なす																			
	ピーマン	○	○	○	○	○		△		○	○	○	○	△	○	○	○	○		
	とうがらし																			
	いちご	○	○	○	○	○				○	○		○	△	○	○	○	○		
	えだまめ	○	○	○	○	○		○		○	○		○	△	○		○	○		
	さやいんげん																			
	さやえんどう	○	○	○	○	○				○	○	△	○		○		○	○		
	寒えんどう																			
	とうもろこし	○	○	○	○	○		○		○	○		○				○	○	○	
	おくら	○	○	○	○	○		△		○	○		○		○	○	○	○	○	
	ほうれんそう	○	○	○	○	○		△		○	○		○		○	○	○	○	○	
	しゅんぎく																			
	モロヘイヤ																			
	にら																			
	パセリ	○	○	○	○	○		○		○	○		○	△			○	○	○	
	みつば																			
	空芯菜																			
	おかひじき																			
	レタス	○	○	○	○	○												○	○	○
	非結球レタス																			
	ねぎ	○	○	○	○	○		○		○	○		○		○	○	○	○		
	わけねぎ																			
	あさつき	○	○	○	○	○		○		○	○		○	△	○	○	○	○		
	らっきょう																			
	たまねぎ	○	○	○	○	○		○		○	○		○					○	○	○
	にんにく																			
はくさい																				
さんとうさい	○	○	○	○	○		○		○	○	△	○		○		○	○	○		
たいさい																				
チンゲンサイ																				
みずな	○	○	○	○	○		○		○	○	△	○	△	○	○	○	○	○		
みぶな																				
タアサイ																				
こまつな																				
ルッコラ	○	○	○	○	○		○		○	○	△	○	△	○	○	○	○			
べかな																				
キャベツ	○	○	○	○	○		○		○	○	△	○		○		○	○			
コールフビ																				
ブロッコリー	○	○	○	○	○		○		○	○	△	○		○		○	○	○		
カリフラワー																				

※△は限定的に該当している項目。

●は県が独自に確認している技術。具体的内容は第6参照。

区分	内容	有機質資材施用技術		化学肥料低減技術			化学農業低減技術										県独自技術		
		①たい肥等有機質資材施用技術	②緑肥作物利用技術	①局所施肥技術	②肥効調節型肥料施用技術	③有機質肥料施用技術	①温湯種子消毒技術	②機械除草技術	③除草用動物利用技術	④生物農薬利用技術	⑤対抗植物利用技術	⑥抵抗性品種栽培・台木利用技術	⑦天然物質由来農薬利用技術	⑧土壌還元消毒技術	⑨熱利用土壌消毒技術	⑩光利用技術		⑪被覆栽培技術	⑫フェロモン剤利用技術
作物名																			
野菜	しそ	○	○	○	○	○		△	○	○		○		○	○	○	○	○	
	花みょうが																		
	みょうがたけ	○	○		○	○		△	○				○	△					○
	ふき																		
	アスパラガス																		
	だいこん	○	○	○	○	○		△	○	○	△	○	△				○	○	○
	葉だいこん																		
	かぶ	○	○	○	○	○		○	○	○	△	○	△	○			○	○	○
	ラディッシュ																		
	にんじん	○	○	○	○	○		○	○	○		○					○	○	○
	ごぼう	○	○	○	○	○		○	○	○		○					○	○	○
	ヤーコン																		
	かんしょ	○	○	○	○	○		○	○	○		○						○	○
	ばれいしょ	○	○	○	○	○		○	○	○		○						○	○
	さといも	○	○	○	○	○		○	○	○		○							○
	しょうが																		○
やまのいも	○	○	○	○	○		○	○	○		○							○	
くわい	○			○	○				○									○	
れんこん																			
うど	○	○	○	○	○		○	○	○		○						○	○	
果樹	なし	○	○	○	○	○		○	○										
	ぶどう	○	○	○	○	○		○	○						○	○	○	○	
	すもも																		
	ブルーベリー																		
	くり																		
	かき																		
	うめ	○	○	○	○	○		○	○			○					○	○	○
	あんず																		
	ゆず																		
	ブルーベリー																		
	キウイフルーツ																		
	りんご	○	○	○	○	○		○	○			○					○	○	○
もも	○	○	○	○	○		○	○			○				○	○	○	○	
いちじく	○	○	○	○	○		○	○			○				○	○	○	○	
植木・花	露地植木	○		○	○	○		○	○			○						○	○
	コンテナ植木	○		○	○	○		○	○			○						○	○
	施設切花	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○				○	○	●
	露地切花	○	○	○	○	○		○	○	○		○					○	○	○
	鉢物	○			○	○		○	○			○					○	○	○
茶・特産・飼料作物	苗物(ポット)																		
	茶	○		○	○	○		○	○		○	○			○		○	○	●
	桑	○	○		○	○		○	○									○	●
	こんにやく	○	○		○	○		△	○	○		○						○	○
	そば	○	○	○		○		○	○						○			○	
	飼料とうもろこし	○			○	○		○	○			○						○	○
	イタリアンライグラス	○				○		○	○									○	●
エン麦			○		○		○	○											
飼料用イネ	○	○	○	○	○	○	○	○	○		△							○	
景観形成作物	景観形成作物	○				○		○	○										

※△は限定的に該当している項目。
●は県が独自に確認している技術。具体的内容は第6参照。

第6 農作物別持続性の高い農業生産方式の内容

<主穀>	
1	水稲----- 1 1
2	麦----- 1 2
3	大豆----- 1 3
<野菜>	
4	きゅうり メロン にがうり ----- 1 4
5	すいか かぼちゃ ----- 1 5
6	トマト ミニトマト ----- 1 6
7	なす ピーマン とうがらし ----- 1 7
8	いちご ----- 1 8
9	えだまめ さやいんげん ----- 1 9
10	さやえんどう 実えんどう ----- 2 0
11	とうもろこし ----- 2 1
12	おくら ----- 2 2
13	ほうれんそう ----- 2 3
14	しゅんぎく モロヘイヤ なら パセリ みつば 空芯菜 おかひじき ----- 2 4
15	レタス 非結球レタス ----- 2 5
16	ねぎ わけねぎ ----- 2 6
17	あさつき らっきょう ----- 2 7
18	たまねぎ にんにく ----- 2 8
19	はくさい さんとうさい たいさい ----- 2 9
20	チンゲンサイ みずな みぶな タアサイ ----- 3 0
21	こまつな ルッコラ ベカナ ----- 3 1
22	キャベツ コールラビ ----- 3 2
23	ブロッコリー カリフラワー ----- 3 3
24	しそ ----- 3 4
25	花みょうが みょうがたけ ふき アスパラガス ----- 3 5
26	だいこん 葉だいこん ----- 3 6
27	かぶ ラディッシュ ----- 3 7
28	にんじん ----- 3 8
29	ごぼう ヤーコン ----- 3 9
30	かんしょ ----- 4 0
31	ばれいしょ ----- 4 1
32	さといも しょうが ----- 4 2
33	やまのいも ----- 4 3
34	くわい れんこん ----- 4 4
35	うど ----- 4 5
<果樹>	
36	なし ぶどう ----- 4 6
37	すもも ブルン くり かき うめ あんず ゆず ブルベリー キウフルーツ ----- 4 7
38	りんご ----- 4 8
39	もも ----- 4 9
40	いちじく ----- 5 0
<植木・花>	
41	露地植木 ----- 5 1
42	コンテナ植木 ----- 5 2
43	施設切花 ----- 5 3
44	露地切花 ----- 5 4
45	鉢物・苗物（ポット） ----- 5 5
<茶・特産・飼料作物>	
46	茶 ----- 5 6
47	桑 ----- 5 7
48	こんにゃく ----- 5 8
49	そば ----- 5 8
50	飼料とうもろこし ----- 5 9
51	イタリアンライグラス エン麦 ----- 5 9
52	飼料用イネ ----- 6 0
<景観形成作物>	
53	景観形成作物 ----- 6 1
	参 考 ----- 6 2

※各項目の○印は導入すべき省令技術を、●印はその他の技術を、・印は各技術の具体例を、◇印はその他の事項を示しています。

水 稲

1 水稻

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥等の施用 ・ 稲わら、もみがら、麦わら等の鋤込み ○ 緑肥作物の利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ レンゲ、クローバー、麦（ライ麦、エン麦）、イタリアライグラス等
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 側条施肥移植機、播種機の利用 ・ 育苗箱全量施肥技術 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 温湯種子消毒技術 ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 水田中耕除草機械の利用 ○ 除草用動物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マガモ又はアイガモを利用した栽培 ・ コイを利用した栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培 (品種例：彩のかがやき 等) ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 紙マルチ田植機の利用 ● 要防除水準に基づいた防除
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み後は還元状態となるため期間をおいて移植等を行う。 また、入水前に土壌分析を行う。 ◇ ライ麦、エン麦、イタリアライグラスは麦畑への侵入、雑草化に注意する。

(注) たい肥は C/N 比 10~35 以下、幼植物発芽試験で異常を認められないものを基本とする。

麦

2 麦

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥等の施用 ・ 稲わら、もみがら、麦わら、大豆茎莢等の鋤込み ○ 緑肥作物の利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マメ科植物、ソルゴー、セスバニア、アルタラリア等
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 播種溝施肥技術の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 中耕、土入れ技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 不耕起播種機利用による前作の稲わらマルチ技術 ● 耕種的病害虫防除技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 播種期の移動による耕種的防除 ・ 土入れによる耕種的防除
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は発芽障害の恐れがあるため、期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注)たい肥は C/N 比 10~35 以下、幼植物発芽試験で異常を認められないものを基本とする。

大豆

3 大豆

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥等の施用 ・ 稲わら、もみがら、麦わら等の鋤込み ○ 緑肥作物の利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 麦（ライ麦、エン麦）等の出穂前鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 播種溝施肥技術の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 中耕、培土技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 作付け前年度にクロタラリア等を導入 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 不耕起播種機利用による前作の麦わらマルチ技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は発芽障害の恐れがあるため、期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注)たい肥は C/N 比 10~35 以下、幼植物発芽試験で異常を認められないものを基本とする。

きゅうり・メロン・にがうり

4 きゅうり メロン にがうり

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麥、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリーゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリーゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術（きゅうり、メロン） ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。また、定植前に土壌分析を行う。 ◇ 購入苗は、病害虫に侵されていない健全な苗を利用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

すいか・かぼちゃ

5 すいか かぼちゃ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦等 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術（すいか） ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ トンネル栽培 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。 また、定植前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

トマト・ミニトマト

6 トマト ミニトマト

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麥、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。 また、定植前に土壌分析を行う。 ◇ 購入苗は、病害虫に侵されていない健全な苗を利用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせる事。

なす・ピーマン・とうがらし

7 なす ピーマン とうがらし

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培 ● 天敵利用技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。 また、定植前に土壌分析を行う。 ◇ 購入苗は、病害虫に侵されていない健全な苗を利用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

いちご

8 いちご

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適切なたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類等 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて植付ける。 また、植付前に土壌分析を行う。 ◇ 親株には病害虫に侵されていないウイルスフリー株等を利用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

えだまめ・さやいんげん

9 えだまめ さやいんげん

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麥、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ マルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ べたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

さやえんどう・実えんどう

10 さやえんどう 実えんどう

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類等 ○ 抵抗性品種栽培技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ べたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせる事。

とうもろこし

11 とうもろこし

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ マルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、トンネル栽培 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

おくら

12 おくら

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 雨よけ、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後の定植は、障害の恐れがあるため期間をおいて定植を行う。また、定植前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

ほうれんそう

13 ほうれんそう

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦等 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

しゅんぎく・モロヘイヤ・にら・パセリ・みつば・空芯菜・おかひじき

14 しゅんぎく モロヘイヤ にら パセリ みつば 空芯菜 おかひじき

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン類等 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

レタス・非結球レタス

15 レタス 非結球レタス

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。 また、定植前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

ねぎ・わけねぎ

16 ねぎ わけねぎ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの施用 ・ 麦わらの施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立て施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ べたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。 また、定植前に土壌分析を行う。 ◇ 親株には病害虫に侵されていないウイルスフリー株等を利用する。 (わけねぎ、坊主知らず)

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

あさつき・らっきょう

17 あさつき らっきょう

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの施用 ・ 麦わらの施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麥、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立て施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて植付ける。 また、植付前に土壌分析を行う。 ◇ 病害虫に侵されていない健全な種球を使用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

たまねぎ・にんにく

18 たまねぎ にんにく

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麥、ライ麦、セサバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ栽培（育苗期） ・ トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。また、定植前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

はくさい・さんとうさい・たいさい

19 はくさい さんとうさい たいさい

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培技術（はくさい） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

チンゲンサイ・みずな・みぶな・タアサイ

20 チンゲンサイ みずな みぶな タアサイ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培技術（チンゲンサイ） ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

こまつな・ルッコラ・べかな

21 こまつな ルッコラ べかな

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セサバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培技術（こまつな） ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ べたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

キャベツ・コールラビ

22 キャベツ コールラビ

区分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は発芽障害の恐れがあるため、期間をおいて定植する。 また、定植前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

ブロッコリー・カリフラワー

23 ブロッコリー カリフラワー

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鋤込み ・ 麦わらの鋤込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麥、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ・ 側条施肥又は植穴施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類等 ○ 抵抗性品種栽培技術（ブロッコリー） ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は発芽障害の恐れがあるため期間をおいて定植する。また、定植前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

しそ

24 しそ

区分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

花みょうが・みょうがたけ・ふき・アスパラガス

25 花みょうが みょうがたけ ふき アスパラガス

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 稲わら、落ち葉によるマルチ栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥の栽培鋤込みは、前年に行っておく。 ◇ 病害虫に侵されていない健全な根株を使用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

だいこん・葉だいこん

26 だいこん 葉だいこん

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培の場合に限る） ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ べたがけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

かぶ・ラディッシュ

27 かぶ ラディッシュ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適切なたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールト、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ マルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールト、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 抵抗性品種栽培技術（かぶ） ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術（施設栽培の場合に限る） ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、簡易被覆、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

にんじん

28 にんじん

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールト、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールト、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、播種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

ごぼう・ヤーコン

29 ごぼう ヤーコン

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ マルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、稲わら、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナタ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

かんじょ

30 かんじょ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナタ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

ばれいしょ

31 ばれいしょ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナタ油粕等の有機肥料を組み合わせることを。

さといも・しょうが

32 さといも しょうが

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、着色、反射、生分解性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナタ油粕等の有機肥料を組み合わせる事。

やまのいも

33 やまのいも

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セサバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クワタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クワタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鋤込み直後は、発芽障害の恐れがあるため期間をおいて播種等を行う。また、は種前に土壌分析を行う。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

くわい・れんこん

34 くわい れんこん

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	○ たい肥等有機質資材の施用技術 ・ 土壌診断に基づいた完熟たい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み
化学肥料 低減技術	○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 病害虫に侵されていない健全な種球又は種バスを使用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

う ど

35 うど

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた完熟たい肥の施用 ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ、マリゴールド、レンゲ、クローバー、クオタリア等の鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリゴールド、クオタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥は、うど→さといも→緑肥作物→うど等輪作体系の中で組み込み土壌中の線虫や病原菌密度を高めないようにする。 ◇ 病害虫に侵されていない健全な根株を使用する。

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

なし・ぶどう

36 なし ぶどう

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらマルチ腐植後の鍬込み ・ 麦わらマルチ腐植後の鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生の園内利用
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 溝施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生草刈取機利用、雑草刈取機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 多目的防災網被覆、ハウス、雨よけ、袋かけ栽培 ○ フェロモン剤利用技術（なし） ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生、稲わらマルチ利用、麦わらマルチ利用栽培
その他の 留意事項	

- (注1) たい肥を施用した時は、たい肥から有効化する成分量を換算して施肥量を削減する。
また、各種たい肥は必ず完熟したものを施用すること。
- (注2) 草生栽培とはイタリアンライグラスやクローバー等の牧草等を植栽して果樹園の表層を管理する技術であり、年5～6回の草刈りにより、有機質補給等の効果がある。
- (注3) 肥料施用後は、必ずロータリー等で土壌表層を軽く耕耘し、土と良く混和する。

すもも・プルーン・くり・かき・うめ・あんず・ゆず・ ブルーベリー・キウイフルーツ

37 すもも プルーン くり かき うめ あんず ゆず ブルーベリー キウイフルーツ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらマルチ腐植後の鍬込み ・ 麦わらマルチ腐植後の鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生の園内利用
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 溝施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生草刈取機利用、雑草刈取機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 多目的防災網被覆栽培、袋かけ栽培（すもも、プルーン）、防虫ネット（ブルーベリー） ○ フェロモン剤利用技術（すもも、プルーン、あんず、うめ） ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生、稲わらマルチ利用、麦わらマルチ利用栽培
その他の 留意事項	

(注1) たい肥を施用した時は、たい肥から有効化する成分量を換算して施肥量を削減する。
また、各種たい肥は必ず完熟したものを施用すること。

(注2) 草生栽培とはイタリアンライグラスやクローバー等の牧草等を植栽して果樹園の表層を管理する技術であり、年5～6回の草刈りにより、有機質補給等の効果がある。

(注3) 肥料施用後は、必ずロータリー等で土壌表層を軽く耕耘し、土と良く混和する。

りんご

38 りんご

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらマルチ腐植後の鍬込み ・ 麦わらマルチ腐植後の鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生の園内利用
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 溝施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生草刈取機利用、雑草刈取機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 多目的防災網被覆、袋かけ栽培 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生、稲わらマルチ利用、麦わらマルチ利用栽培
その他の 留意事項	

- (注1) たい肥を施用した時は、たい肥から有効化する成分量を換算して施肥量を削減する。
また、各種たい肥は必ず完熟したものを施用すること。
- (注2) 草生栽培とはイタリアンライグラスやクローバー等の牧草等を植栽して果樹園の表層を管理する技術であり、年5～6回の草刈りにより、有機質補給等の効果がある。
- (注3) 肥料施用後は、必ずロータリー等で土壌表層を軽く耕耘し、土と良く混和する。

も も

39 もも

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらマルチ腐植後の鍬込み ・ 麦わらマルチ腐植後の鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生の園内利用
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 溝施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生草刈取機利用、雑草刈取機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 多目的防災網被覆、ハウス、袋かけ栽培 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生、稲わらマルチ利用、麦わらマルチ利用栽培
その他の 留意事項	

- (注1) たい肥を施用した時は、たい肥から有効化する成分量を換算して施肥量を削減する。
また、各種たい肥は必ず完熟したものを施用すること。
- (注2) 草生栽培とはイタリアンライグラスやクローバー等の牧草等を植栽して果樹園の表層を管理する技術であり、年5～6回の草刈りにより、有機質補給等の効果がある。
- (注3) 肥料施用後は、必ずロータリー等で土壌表層を軽く耕耘し、土と良く混和する。

いちじく

40 いちじく

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらマルチ腐植後の鍬込み ・ 麦わらマルチ腐植後の鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生の園内利用
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 溝施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生草刈取機利用、雑草刈取機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 多目的防災網被覆、ハウス栽培 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 草生、稲わらマルチ利用、麦わらマルチ利用、反射マルチフィルム利用
その他の 留意事項	

- (注1) たい肥を施用した時は、たい肥から有効化する成分量を換算して施肥量を削減する。
また、各種たい肥は必ず完熟したものを施用すること。
- (注2) 草生栽培とはイタリアンライグラスやクローバー等の牧草等を植栽して果樹園の表層を管理する技術であり、年5～6回の草刈りにより、有機質補給等の効果がある。
- (注3) 肥料施用後は、必ずロータリー等で土壌表層を軽く耕耘し、土と良く混和する。

露地植木

41 露地植木

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ マルチングとして使用した稲わらの鋤込み ・ マルチングとして使用した麦わらの鋤込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 基肥の植穴施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 追肥の際は畦間に浅い溝を掘り、被覆肥料又は緩効性肥料を施用して肥料の流亡を防ぐ。 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用、雑草刈取機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 稲わらマルチ利用、麦わらマルチ利用栽培
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 生産ほ場等で排出される剪定枝葉等の残渣は、チップ化した後に畜糞等の分解促進物質を混入してたい肥化し、ほ場に投入する。 ◇ 除草労力省力化と乾燥防止のためにマルチング資材として利用していた稲わら及び麦わらは、収穫後にほ場に鋤込む。 ◇ 基肥の植穴施用時には、全面施用は行わない。 ◇ マルチ栽培技術利用時には、株元に稲わら又は麦わらのマルチングを行い、雑草の発生を抑制するとともに乾燥防止につとめる。

(注1) 剪定枝葉の堆肥化に際しては、C/N比40、水分60%になるように畜糞を混合し、完熟してから使用する。

(注2) たい肥を施用したときは、たい肥から有効化する成分量を換算して施肥量を削減する。

コンテナ植木

42 コンテナ植木

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	○ たい肥等有機資材施用技術
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥技術 ・ 基肥のコンテナ底部施肥 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	○ 機械除草技術（コンテナ置場周囲） ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 ・ 反射型マルチフィルム利用技術
その他の 留意事項	◇ 生産管理にともなう剪定枝葉等の残渣は、チップ化した後に畜糞等の分解促進物質を混入してたい肥化し、用土の25%を目安に混入することにより理学性の向上に努める。 ◇ 基肥は植え付け時にコンテナの底部付近に施用し、表層施用は行わない。 ◇ 追肥の際は、被覆肥料又は緩効性肥料を施用する。 ◇ 基肥として、有機質肥料を用土に混入する。 ◇ コンテナ生産ほ場は反射型マルチ資材でマルチングを行い、ほ場及びコンテナ内の雑草発生を抑制するとともに害虫の飛来防止につとめる。 ◇ 植栽に使用される出荷物には、可能な限り生分解性のコンテナを使用する。

(注1) 剪定枝葉の堆肥化に際しては、C/N比40、水分60%になるように畜糞を混合し、完熟してから使用する。

(注2) たい肥を施用したときは、たい肥から有効化する成分量を換算して施肥量を削減する。

施設切花

43 施設切花

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機資質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリーゴールド、カタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類等 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、有色、反射、稲わら、崩壊性マルチフィルム利用栽培 ● 天敵に影響の少ない農薬（IGR剤等）の利用
その他の 留意事項	

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

露地切花

44 露地切花

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機資質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わらの鍬込み ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ソルゴー、小麦、ライ麦、セバニア、エン麦類、ギニアグラス、ペレニアルライグラス、ケンタッキーブルーグラス、グリーンミレット、ヘアリーベッチ等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥機の利用 ・ 畦立てマルチ施肥機の利用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マリーゴールド、カタリア、ギニアグラス、ハブソウ、テンニンギク、ルドベキア、エン麦類等 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 透明、有色、反射、稲わら、崩壊性マルチフィルム利用栽培
その他の 留意事項	

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

鉢物・苗物（ポット）

45 鉢物・苗物（ポット）

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	○ たい肥等有機資質資材の施用技術 ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用
化学肥料 低減技術	○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	○ 機械除草技術 ・ 畑作中耕除草機利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ・ べたがけ、雨よけ、トンネル栽培、防虫ネット ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 反射マルチ利用栽培
その他の 留意事項	

(注1) たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。（→P.62参照）

(注2) 化学肥料の削減をさらに行う場合は、ナメ油粕等の有機肥料を組み合わせること。

茶

46 茶

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	○ たい肥等有機質資材の施用技術 ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥技術 ・ たい肥の植え溝施用 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	○ 機械除草技術 ・ 畑作中耕除草利用栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ 光利用技術 ・ 光反射テープ(防虫テープ)利用による害虫被害抑制技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術(幼木を対象) ・ 反射フィルムマルチ利用栽培 ・ 着色マルチフィルム利用栽培 ・ 稲わらマルチ利用栽培 ● 耕種的防除技術 ・ 浅刈り等による耕種的防除
その他の 留意事項	◇ 性フェロモン剤は、処理面積が50a以上ないと防除効果は低い。

(注) 鶏糞を使用する場合は、石灰を多く含むために茶園土壌のpHに注意すること。

桑

47 桑

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ○ 緑肥作物の利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ヘアリーベッチ、レンゲ等の鋤込み ● 廃条・蚕沙の施用技術
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ● 草生栽培による雑草抑制技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ヘアリーベッチ、レンゲ等による草生栽培
その他の 留意事項	

(注) 廃条・蚕沙たい肥の成分量 (全窒素 0.91%、リン酸 0.24%、カリ 1.24%
(→P. 62 参照))

こんにやく・そば

48 こんにやく

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ エン麦類、ギニアグラス、マリーゴールド等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術（露地栽培に限る） ○ 対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ エン麦類、ギニアグラス等 ○ 天然物質由来農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 黒マルチフィルム利用栽培 ・ 被覆植物によるマルチ栽培
その他の 留意事項	

49 そば

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材の施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用 ・ 稲わら、麦わらの鍬込み ○ 緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ライ麦やエン麦、イアタリアンライグラス等の鍬込み
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 施肥播種機による播種溝施用 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 中耕、培土技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ フェロモン剤利用技術
その他の 留意事項	◇ 麦類への混入を防止する。

(注)たい肥は C/N 比 10~35 以下、幼植物発芽試験で異常を認められないものを基本とする。

飼料とうもろこし・イタリアンライグラス・エン麦

50 飼料とうもろこし

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	○ たい肥等有機資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用
化学肥料 低減技術	○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	○ 機械除草技術 ・ 畑作中耕除草利用栽培 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 ・ マルチフィルム利用技術 ・ 光崩壊性マルチフィルム利用技術
その他の 留意事項	◇ 硝酸性窒素の蓄積防止のため、たい肥の施用量は4t/10aを最大とする ◇ 土壌診断に基づいた適切な牛糞たい肥（窒素成分量2.5%、C/N比20～25）の施肥を基本とする。

(注) 透明及び乳白色フィルムによるマルチ栽培は抑草効果が低いが、硝酸性窒素の蓄積は少ない。

また、生分解性フィルムを使用すること。

51 イタリアンライグラス エン麦

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	○ たい肥等有機質資材の施用技術 ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用。
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥技術 ・ 局所施肥機の利用 ・ 簡易草地更新機の利用 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	○ 機械除草技術 ・ 簡易草地更新機等による部分耕うん除草技術 ○ フェロモン剤利用技術 ● 草生マルチによる無除草剤栽培技術(エン麦) ・ アレロパシー効果のあるマメ科牧草（ヘアリーベッチ ^{注1} 、クリムソンクローバ等）をエン麦と混播し、除草と栄養改善効果を得る。
その他の 留意事項	◇ 硝酸性窒素の蓄積防止のため、たい肥の施用量は4t/10aを最大とする。

(注) ヘアリーベッチの播種量は通常の1/3(1.5kg/10a)とする。

これ以上多いとエン麦の収量が減少する。

飼料用イネ

52 飼料用イネ

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいたたい肥等の施用 ・ 稲わら、もみがら、麦わら等の鍬込み ○ 緑肥作物の利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ レンゲ、クローバー、麦（ライ麦、エン麦）、イタリアンライグラス等
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 側条施肥移植機、播種機の利用 ・ 育苗箱全量施肥技術 ○ 肥効調節型肥料施用技術 ○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 温湯種子消毒技術 ○ 機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 水田中耕除草機械の利用 ○ 除草用動物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マガモ又はアイガモを利用した栽培 ・ コイを利用した栽培 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 (品種例：はまさり、うしもえ 等) ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 紙マルチ田植機の利用
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。 ◇ 緑肥鍬込み後は還元状態となるため期間をおいて移植等を行う。 また、入水前に土壌分析を行う。 ◇ ライ麦、エン麦、イタリアンライグラスは麦畑への進入、雑草化に注意する。

(注)たい肥は C/N 比 10~35 以下、幼植物発芽試験で異常を認められないものを基本とする。

景観形成作物

53 景観形成作物

区 分	持続性の高い農業生産技術の内容
有機質資材 施用技術	○ たい肥等有機資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいたたい肥の施用
化学肥料	○ 有機質肥料施用技術
化学農薬 低減技術	○ 機械除草技術
その他の 留意事項	◇ 土壌診断を行った上で資材施用量を決定する。

参 考

<たい肥類の成分含有量等>

たい肥は、稲わらたい肥（窒素成分0.4%、C/N比20）の施用を前提としており、稲わらたい肥の代わりに牛糞たい肥を用いる場合は、たい肥の窒素成分量及び化学肥料代替率に基づき補正した有効成分量を勘案する必要がある。たい肥で賄う窒素施用量は全体の50%程度が最大である。

（例）

資材名	成分含有(原物%)			化学肥料代替率(%)			有効成分量(kg/t)		
	窒素	リン酸	カリ	窒素	リン酸	カリ	窒素	リン酸	カリ
バークたい肥	0.47	0.33	0.28	20	60	90	0.9	2.0	2.5
モミガラたい肥	0.50	0.56	0.47	20	50	90	1.0	2.8	4.2
牛糞たい肥	0.71	0.70	0.74	30	60	90	2.1	4.2	6.7